



日本語ディクテーションサイト(D4E)の開発

佐藤 礼子・榎原実香・小松 翠・山元 啓史(東京工業大学)

概要: 日本語初級学習者を対象に、1日10文3分程度のディクテーション練習をオンラインで毎日継続的に行うディクテーション練習サイト(Dictation for Every Day; D4E)を開発した。会話パターンの習得とリスニング力の向上を目的とする。システムの開発・試行の結果、D4Eは自然なインプットを与えること、継続的な練習を実現すること、学習者自身による修正やエピソードの選択が可能であることがわかり、自習としてディクテーション練習ができる環境であることが確認された。

1. 背景と目的

- ・**ディクテーション** はシンプルで信頼性の高い練習法(Savignon, 1982)で、ノート・メモをとる等の日常の言語行動に近い、複数の**認知処理が統合されたスキル**(Frauenfelder et al., 1987)。語学テストと**相関**あり (Cai, 2013)。
- ・**自然なインプット** には言語習得の効果があるとされるが(Krashen & Terrell, 1983; Blau, 1990)、**日本に入国できない学生には自然な日本語インプット**の環境が**いつもあるわけではない**。自然な会話文を素材としたディクテーション練習(D4E)により、**自然なインプットを増やしたい**。



図1: エピソードの選択

2. D4Eの開発方法および仕様

材料: 日本語教育用ディクテーションセンテンス・データベース (JCS-db; 山元・ホドシチェク, 2020)から、1エピソードあたり10文(想定学習時間3分程度)を150エピソード分、選択した。

操作: 学習中はタイプとリターンキーのみ使用し、マウス操作は不要。

- ・2回以上聞く場合には、ESCキーを押すか、**を(⏮)ツク**する。
- ・解答の**不正確箇所**は文字単位で「？」とフィードバック。
- ・正解した場合や3回目誤答が続いた後、**正解**を表示する。

補助教材: ワークブック(ダイアログ、単語ノート、解説)ローマ字入力練習ページ、ローマ字カナ変換表



図2: 学習画面



図3: ワークブックの一部

3. 試用の結果

参加者: 大学院生、初級開始レベル 45名。試用開始時点、多くは日本に入国前。全員英語が使える。

実施方法と期間: 授業「ことばと文化1」3クラスで授業内容とは独立した宿題として実施。2020年10月6日から11月24日まで計50日間、ep.1-50を1日あたり1エピソードずつを目安に学習した。

試用の経過: 入力に関する質問はなかった。音量・音質、端末・ブラウザによる違いも特に報告されなかった。中断した練習履歴も見られなかった。

事後の感想: 試用期間終了後、参加者にD4Eについての感想を求め、45名全員から得られた。

表1: D4E試用に関する学生の感想(抜粋、筆者訳)

2. 最初、ネイティブのスピードは難しかったが、何度も聞いているうちに明確になってきた。
3. 短い時間で練習でき、毎日の練習が習慣化している。
4. 思っていた発音と違うことに気がついた。
7. 教科書のように音節がはっきり話されているのではなく、自然な会話なのでとてもやりがいを感じる。
10. 毎日少しずつ学習していくというコンセプトがよい。
11. 日常生活の中で日本人の話すスラングも学べる。

4. 考察および成果

(1) 学習習慣の定着と課題の分量

- ・ログファイルより、1回の学習時間が3~6分程度と短時間だったことから、操作を最小限にとどめた設計で自然な会話のペースを活かした。
- ・毎日~数日に1回のペースでの学習が定着。一日エピソード10文という分量は継続学習に適切だった。
- ・1回目で正解することは稀で、多くの場合、不正解があったエピソードは後でもう一度やり直していた。

(2) スキルの訓練への貢献

・「はじめは難しかったと思ったが、前にやったエピソードをやってみると意外と簡単にできた」という感想から、同じ文を何回も聞いて何であるかを感じ取る能力杉浦ら, 2002)や手続きの知識処理の自動化など、スキルの訓練に貢献したと考えられる。

(3) 改善点

- ・音声スピードが選べるようにする。
- ・正解情報の提示時間の延長と関連情報の提示。
- ・弱点克服モードを開発する。